文學博士服部宇之吉著

東洋倫理綱要

東京 大日本漢文學會藏版

文學博士服部宇之吉著

東洋倫理綱要

東京大日本漢文學會藏版

大正五年二月二十日印刷
大正五年二月廿五日發行
大正六年十月二十日再版發行
大正八年八月二十日三版發行
大正十年十月一日四版發行

東洋倫理綱要

定價金貳圓七拾錢

著作者　服部宇之吉

發行者　東京市神田區四小川町二丁目一番地　竹內伊四郎

印刷者　東京市神田區仲猿樂町十番地　平賀久吉

發行所　東京市神田區西小川町二ノ一　大日本漢文學會
電話局九段二七四〇番
振替口座東京七五八番

發賣所　東京市神田區西小川町二ノ一　合資會社明治出版社
振替東京二五七〇番

不許複製

序

東洋には東洋の倫理あり、西洋には西洋の倫理あり、各其の特色を有し、共に尊重せざる可からず。世人動もすれば乃ち西洋倫理を偏重して、東洋倫理を輕視せんとす、慨嘆せざる可けんや。

本會此に鑒るあり、會長服部博士に請うて本書を發刊す。博士は學古今に亙り識東西を兼ね、實に我が學界の重鎭たり。其の東洋倫理を說かるゝや西洋倫理を參酌して組織整然、叙述簡明平易、一讀蒙を啓くの思あらしむ。

本書は東洋倫理の大綱を說き盡して亦餘蘊なし。

內篇は博士が明治四十四年文部省の囑託に依り、外篇は同年大阪府の依賴に應じ、共に中等教員の爲めに講演せられたるものにして、內外或は重複する所無きに非ざれど、彼に簡にして此に詳なるあり彼に密にして此に疎なるあり、內外相待ちて而して後始めて完し、故に此に兩篇を併せ收めぬ。附錄三篇は曾て某誌上に揭載せられたるもの、亦本篇に補あるを以て特に之を附せり。

內篇(及附錄第二)は博士の執筆に係り、外篇(及附錄第一第二)は講演の筆記を訂正せられたるものとす。博士は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

目下米國ハーバート大學に在りて東洋倫理を講ぜらる、親しく校正の勞を請ふ能はず、亥豕の責は一に編輯者に在り、讀者之を諒せよ。

大正五年二月

大日本漢文學會

東洋倫理綱要目次

內篇

第一章　天……一
第二章　性……三
第三章　道……四
第四章　教……六四
第五章　家に對する義務……八八
第六章　社會に對する義務……一一四
第七章　國家に對する義務……一三三
第八章　儒教と孔子教の別……一三九

外篇

第一章　儒教と道教……一四七

第二章　儒教に含まるゝ宗教思想……一七五
第三章　家族制度……二〇五
第四章　社會組織……二四〇
第五章　孔子教……二八一
第六章　孔子の人格……二九五
第七章　古典と支那の國民思想……三一八
附錄
第一　儒教倫理の根本思想……三三九
第二　儒教に於ける君臣の大義……三六六
第三　儒教に於ける祭祀の意義……三八三
索引……四二五

目次終

東洋倫理綱要

文學博士　服部宇之吉著

内篇

第一章　天

天は人物を生ず。人は生を天に受けて自ら恒性有り、之に率ひて道立つ、道立ちて教生ず。而して教は必ず政と相待ちて然る後に行はる。天は生民の聰明睿智にして有德なる者に、政教の權を授け、て君師を一身に兼ね以て民を教へ民を治めしむ。民因りて以て各〻其の生を全くす。是れ儒教の根本思想なり。此こに先づ天の意義を明らかにし、然る後に漸く性・道・教等の義を論ぜん。

經傳に天を言ふもの、或は天と稱し或は帝と稱す。其の天と稱するものに、單に天と稱するものと、蒼天・昊天・上天・皇天等と稱するものとあり。帝と稱するものに、亦單に帝と稱するものと、上帝・五帝等と稱するものとあり。又昊天上帝の如く天と帝とを連ねて稱するものあり。之に關して先儒の說亦一樣ならず。今先づ蒼天等の名卽ち天の上に更に一字を冠して成る所の名稱に就きて見ん。此の類の名非に五有り、卽ち蒼天・昊天・旻天・上天及び皇天是れなり。五者の名義に關しては古來二說有り、(一)は四時によりて名を異にすと爲し、(二)は五者各〻宜しき所を用て名と爲すと云ふ。別に第三說として五天の名は四方によりて異なりと爲すもの有るが如し。周禮鄭注に引ける先鄭の說に上天は北方の天と云ひ、淮南子天文訓に天の九野を說きて東方は蒼天、西方は昊天と云へる等に徵すれば、五天を四方に配したる說有りしものの如くなれども共の詳かなることは今得て知るべからず、故に暫く之を略し專ら前二說に就きて言はん。五天を四時に配するものは許愼五經異義に擧げたる今文尙書歐陽說卽ち是れなり。許愼其の說を述べて春曰昊天、夏曰蒼天、秋曰旻

天、冬曰上天、總爲皇天、爾雅亦然と云へり。然るに今本爾雅釋天に穹蒼蒼天也、春爲蒼天、夏爲昊天、秋爲旻天、冬爲上天、四時とありて許愼の言と合せず。二者の異なるところは、春夏二時に言ふ所の名が相異なること、及び歐陽說は皇天を天の總名と爲せるに今本爾雅は蒼天を春の天と爲す外に又天の總名と爲したるとの二點なり。而して此れ等五天の意義に關しては、爾雅郭璞注と爾雅邢昺疏に引く所の李巡の說と多少異なるところあり。郭璞は萬物蒼蒼然生を以て蒼天を釋し、氣皓旰を以て昊天を釋し、旻猶愍也、愍萬物彫落を以て旻天の義と爲し、時無事在上臨下而已を以て上天の義と爲せり。然るに李巡は春萬物始生、其色蒼蒼、故曰蒼天、夏萬物盛壯、其氣昊大、故曰昊天。秋萬物成熟皆有文章、故曰旻天。冬陰氣在上、萬物伏藏、故曰上天と云へり。二說の相異は昊天旻天の二者に於て最も著るし、郭璞は夏天日光の强烈なるを以て昊天の義と爲せるに、李巡は元氣の廣大を以て昊天の義と爲せり、郭璞は愍を以て旻を解せるに、李巡は文章を以て旻を解せり。而して歐陽說に春に昊天夏に蒼天と云へるに就きて、邢昺は春氣博施、故以廣大言之。夏氣高明、故以遠大言之と云ひ、皇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

天に關しては皇君也、尊而君之、則稱皇天と說けり。以上諸說多少の異同ありと雖も、大體は四時に於ける天の情態に從ひて名を立つと爲すに於ては則ち一致せり。但仔細に之を察すれば、郭璞の昊天を說くや、春に於ける天の情態と言はんよりは、寧ろ天の萬物に對する心理を以て言ふものにて他の三天と其の趣を異にす。又歐陽說の皇天なるものも果して邢疏の義の如くんば、是れ人の天に對する心理より立てたる名にて、亦天其れ自身の情態にあらず。此こに於て四時說は一部分第二說と相交涉するところ有るを見る。第二說は卽ち前に言へるが如く宜しき所を用て稱すと爲すものにて、五經異義に擧げたる古文尚書說、及び詩王風黍離篇毛傳の說皆是れなり。毛傳に蒼天以體言之、尊而君之、稱皇天、元氣廣大、則稱昊天、仁覆閔下、則稱旻天、自上降鑒、則稱上天、遠視之蒼蒼然、則稱蒼天とあり、古文尚書說亦之に同じ、但蒼天以體言之の一句無きのみ。蓋し毛傳は爾雅に穹蒼蒼天也、春爲蒼天と云へるものと同じく、蒼天を二樣の義あるものと爲し、一は天の體を云ひ一は下より視て蒼然たるを以て云ふと爲せるなり。第二說は天を言はんとする時其の場合に從ひて五

天の何れか一を用ふと爲すなり、例へば天の遠くして知るべからずと爲す場合には蒼天と云ひ、天の下民に臨監するを以て言はんとする場合には上天と云ふが如く、各宜しき所を用て稱す、四時の別に係はらずと爲すなり。而して詩黍離篇孔穎達正義に引ける鄭玄の說は、蓋し第一說と第二說との調和を試みたるものの如し。今二說に就きて其の可否を論ぜん。經傳中五天の名最も多く見ゆるものは詩なり、而して詩は景物を以て比を爲し、或は興を起こし或は直ちに景物を賦すること多ければ、若し五天の名必ず四時によりて立ちしものならんには、詩中之を證すべきもの多かるべし。然るに詩中引きて以て四時說を證すべきもの甚だ少く、多くは皆四時說を以て解すべからざるものなり。例へば、王風黍離三章、每章黍の離離たるを以て興を起こし宗周の衰頹を歎じ、悠悠蒼天、此何人哉の句を以て結び無限の感慨を寓せり。第一章は彼黍離離、彼稷之苗と云ひ、第二章は彼黍離離、彼稷之穗と云ひ、第三章は彼黍離離、彼稷之實と云ひ、三章季節を異にし稷の苗より穗出でたる時に進み遂に其の實る時に至れり。孔穎達は苗は六月、穗は七月、實は八月なりと云へり。然

れば此の詩の蒼天は春に繫けて見るべからざるは勿論、夏に繫くるも亦不可なり。秦風黄鳥篇は穆公死し三良之に殉したるを悼みたる詩にて、交交黄鳥を以て興を起こし彼蒼者天、殲我良人と歎ぜり。春秋文公六年左傳に穆公の死を記し三良殉死の事を詳かにせり。穆公の死は春秋に載せず左傳亦月を記さずと雖も、前後の文より推せば蓋し六月の事なるべし。然れば其の葬は如何に晩るるも翌春にはあらざるべく、彼蒼者天を以て春の天と爲すべからざること明らかなり。小雅節南山・雨無正・巧言・大雅抑・桑柔・雲漢等昊天を云ふもの多けれど雲漢一篇夏に屬する外其の他概ね時の知るべきもの無し。小雅小明・信南山・大雅文王等上天を云ふもの多し、小明・信南山は冬時に屬するも其の餘は時を知るべからず。小雅小旻・大雅召旻等均しく旻天を云ふと雖も皆時を見るべからず。凡そ此れ等の詩皆必ず時を以て論ぜんとせば反りて無中生有の過に陷り、詩人の意に背くに至らん。詩既に然り況や書等をや。四時を以て五天を說くことは或る特殊の場合の外には復た適用すべからざること知るべきなり。抑〻蒼は尙書皐陶謨の海隅蒼生、莊子逍遙遊の莽蒼等皆

均しく遠く望みて物の色の判別し難きを以て名と爲すものにて、莊子が天之蒼蒼、其正色邪、其遠而無所至極邪と言へるは最も善く蒼の義を觀るべきもの也。蒼色蒼然の語亦以て蒼の義を觀るべし。然れば蒼天は天の蒼蒼たるによりて直ちに以て天の通稱と爲すべき外に、遠くして知り難く測へ難きを以て言ふに用ひらる、是れ悠悠の語と連ねて悠悠蒼天と云ふ所以なり。詩小雅巧言に悠悠昊天の語あり、瞻卬に藐藐昊天の語あり、朱子は悠悠は遠大、藐藐は高遠と解して天の形容と爲せども、鄭玄は悠悠は憂思と釋し、毛傳、鄭箋共に藐藐は天に比すべき王者の德を美する語と爲せり。昊は廣大の義なれば昊天を形容して悠悠藐藐と言はんも不倫と爲さず。但廣大は天の體を以て言ふ者なれば單に遠を以て言ふと同じからず、高又は大は遠と思想の上にて相聯關すと雖も、專ら遠を以て言ふ時は必ずしも高又は大の義を含むにあらず、故に悠悠は專ら廣大を以て言ふ所の昊天と結び付くるよりも、遠くして知り難きを以て云ふ所の蒼天と結び付くるこそ自然ならんめ。尙書堯典に欽若昊天と云へるは、日月星辰の麗く所のものたる天の體を以て言へるものにて、蒼

天等の語を以て之に代ふべきにあらず。體を以て天を云ふ時は必ず其の廣大を以てすべき者なり。天の體は日月星辰の麗く所のものなれば此こに明又は昭の聯想を生ず、故に昊天には此れ等の語を連用し得べし。昊天は詩小雅小旻、召旻の旻天疾威、尙書多士の弗弔旻天等、義を天の下民を愍むに取れり。哀公十六年左傳に孔子死せる時、魯哀公之を誄して旻天不弔云云と云へり、周禮鄭注に引ける先鄭の說には之を閔天不淑に作れり。詩大雅召旻の序に旻閔也とあれば閔天は旻天の解釋とも見るべし。孟子に舜往于田、號泣于旻天于父母の語あり（古文尙書大禹謨にも見ゆ、）。皆天を呼びて心の憂愁を愬ふるものにて義を天の民を愍むに取る。特に孟子に言ふ所の舜の場合に最も善く閔天の義に副ふを覺ゆ。蓋し舜は心を盡くして父母に事へ尙ほ其の悅ぶ所とならず、乃ち田に往き獨り天を呼びて其の苦哀を愬へ父母の己の心を諒とせんことを望みしものにて、義を天の人を閔むの情有るに取りて旻天と云へるなり。若し之を蒼天と云はんか、父母の己を知らざることを怨むの情見はるのみにて、血に泣きて父母の己を諒とせんことを望む所の孝子の情見はれず。昊天若

くは上天を呼ばんか、此の場合全く無意義となるべし。次に上天は人の上に在るを以て言ふものにて、上は臨を聯想し又明を聯想す。老子にも明を上、昧を下と並び言へるは上が明を聯想するによる。故に詩小雅小明に明明上天照臨下土と云ひて明、臨を上天に就きて言へり。詩に皇天を言ふものは大雅抑篇周頌雝篇のみ、書に至れば則ち多し。而して皇天には威・命・監等の義を以て言ひ用例自ら他の天と異なり、蓋し皇は大又は君の意有るを以て皇天は特に尊びて美するに言ふなり。以上五天中にて上帝と連ねて用ひらるるものは皇天及び昊天あるのみ、卽ち皇天上帝又は昊天上帝の語あるも、蒼天上帝・昊天上帝若くは上天上帝の語無し。皇・昊共に大を以て義と爲すを以て此の用法あるなり。而して遠く臨みて蒼蒼たるを以て蒼天と稱する場合を除くの外は、五天皆單に形體を以て稱するに非ずして、人事を主宰するものとして見たること明らかなり。但上帝と連用さるる皇天及び昊天に於て此の思想最も顯著なるを覺ゆ。然れば則ち五天の名各〻特別の意義有りて、場合に應じ其の宜しき所を用て稱することは復た疑ふべからず。四時に配するの說は一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb